

# 保育士養成課程における施設実習の成果と課題に関する考察

聖園学園短期大学 講師 藤原 法生

## A Study on the Achievements and Challenges of Child Welfare Facility Training in Childcare Worker Training Courses

FUJIWARA Norio

Instructor, Misono Gakuen Junior College

### 要 約

保育士養成課程における施設実習について、聖園学園短期大学学生の実習開始前の関心、意欲は教育実習や保育所実習に比べると低いものとする。一方で、実習終了後には、経験や学びに充実感や達成感を得るなど、施設実習を肯定的にとらえる学生が多い。本研究では、施設実習に取り組む学生（2年生）を対象に、実習前後の意識、学びの成果、課題等について調査分析し、その実態を明らかにすることを目的とした。また、実習指導のあり方についても考察した。

実習開始前の意識についての調査では、88%の学生が「不安」と回答し、実習終了後の調査では、99%の学生が「意義があった」と回答した。仮説のとおり、実習前後の意識の変化は非常に大きいことが分かった。

また、実習開始前の期待と不安、実習終了後の成果と課題の具体的な内容についても、児童福祉施設の種別ごとに調査分析した。結果は施設種別により異なるが、「実習施設」や「支援の内容についての理解」など、概ね実習開始前に期待した事項が成果として多く挙げられていた。一方で、実習開始前に不安としていた、「児童との適切な関わり」や「専門的対応」といった専門的かつ実践的な活動や学びに課題があることが分かった。

以上のことから明らかになった期待、不安、成果、課題を踏まえ、事例学習や演習などを積極的に取り入れた教育・実習指導を行うことにより、実習開始前の不安を軽減することができれば、施設実習の成果と意義がより高まるものとする。

キーワード：保育士養成課程、施設実習、実習開始前の期待と不安、実習の成果と課題

Key words: childcare worker training courses, training at child welfare facility, expectations and anxieties before starting the training, achievements and challenges of the training

## 目次

### はじめに

- 1 聖園学園短期大学の施設実習の概要
- 2 先行研究
- 3 研究の目的
- 4 研究方法

### 第1章 実習前後の意識

- 1 実習開始前の期待と不安
- 2 実習の意義の有無

### 第2章 実習開始前の期待と不安、実習の成果と課題

- 1 児童養護施設
- 2 乳児院
- 3 障害児施設
- 4 母子生活支援施設
- 5 児童相談所 (一時保護施設)
- 6 児童自立支援施設

### おわりに

### はじめに

#### 1 聖園学園短期大学の施設実習の概要

保育士養成課程における「保育実習Ⅰ」は、保育所等で行う実習と、保育所以外の児童福祉施設で行う実習で構成されている。このうち、保育所以外の児童福祉施設 (以下、児童福祉施設) で行う実習を、一般に「施設実習」と呼称している。

聖園学園短期大学 (以下、本学) では、施設実習を2年次夏季に実施している。実習施設は、児童養護施設、乳児院、障害児入所施設、児童発達支援センター、母子生活支援施設、児童相談所 (一時保護施設)、児童自立支援施設の計18施設である。実習期間はすべて10日間である。また、同一期間での受入人数に限りがあるため、A班・B班・C班の3期間に分けて実施している。現在は、学生数が減少したことにより2期間でも実施可能だが、学生が可能な限り希望する施設で実習することができるよう、3期間での実施を継続している。

本学学生は、本学に入学を希望する段階において、その多くが保育所、認定こども園、幼稚園等で働くことを希望しているため、児童福祉施設に対する関心はもとより、施設実習に対する関心も教育実習や保育所実習に比べて低いと考えられる。また、児童福祉施設の実態についての理解が不足していることにより、施設実習や実習施設に対し不安を感じる学生が多いことが、施設実習に対する意欲や期待感の低さにつながっているものと推測する。

これに対し、実習終了後には、経験や学びが豊富であることに充実感や達成感を得る学生や、10日間では物足りないと感じる学生が多い。

保育所等での実習や教育実習は、2年間で2回ずつ実施していることに対し、施設実習は2年次の1回しか実施しないにもかかわらず、学生にとって、施設実習における経験や学びは非常に大きく、その後の学修や卒業後の進路選択にも影響を与えているものとなっている。

#### 2 先行研究

施設実習に対する学生の意識調査や、実習指導に関する先行研究は多くある。学生の実習に対する意識に関する研究では、実習開始前の不安が実習終了後の肯定感に変化した結果を示すものがある。

本学学生も、実習前後の意識の変化については、同様の結果となると予想した。そのうえで、他の研究では、その内容を選択肢方式で分析しているものがあるのに対し、本研究では、それを学生の自由記述をもとに分析することで、より具体的な根拠を明らかにするものである。さらに、その具体的な内容をもとに、実習指導のあり方についても考察した。

#### 3 研究の目的

2023年度と2024年度の施設実習を行う学生 (2年生) を対象に、実習前後の意識、学びの成果、課題等について調査分析し、その実態を明らかにするとともに、効果的な実習指導のあり方について考察することを目的とした。

#### 4 研究方法

2023年度と2024年度に施設実習を行った学生 (2年生) を対象に、実習開始前には施設実習に対する「期待と不安」と「その内容」について、実習終了後には「実習の意義の有無」と「成果と課題」について調査した。いずれも質問紙調査 (集合調査) で実施した。

回答方法は、「実習開始前の期待と不安」、「実習終了後の意義の有無」の2問については選択式、その内容については自由記述とした。自由記述については、学生の回答の中から類似している語句を文脈から判断して分類し集計した。

#### 【調査の実施時期】

2023年度 実習開始前：7月 実習終了後：9月  
2024年度 実習開始前：7月 実習終了後：9月

#### 【質問紙の内容】

##### 実習開始前

- 質問1. 期待することは何ですか (自由記述)  
質問2. 不安なことは何ですか (自由記述)  
質問3. 期待と不安、現時点で大きいのはどちらですか (二者択一)

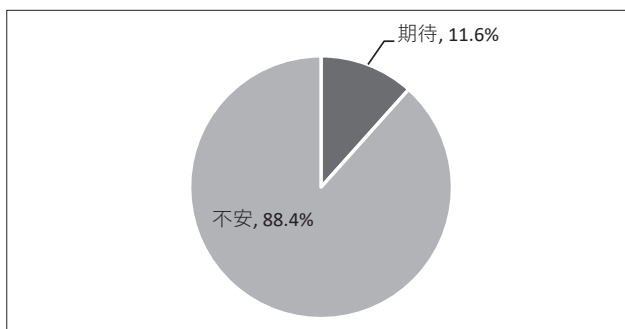
実習終了後

- 質問1. 自身の実習成果は何ですか（自由記述）
- 質問2. 課題として残ったことは何ですか（自由記述）
- 質問3. 施設実習の意義はありましたか（二者択一）

## 第1章 実習前後の意識

第1章では、学生は、施設実習開始前に「期待」と「不安」のどちらを大きく感じているか、また、実習終了後に「実習の意義があったか」について考察した。

### 1 実習開始前の期待と不安 回答者数 2023年：79名、2024年：50名、計：129名

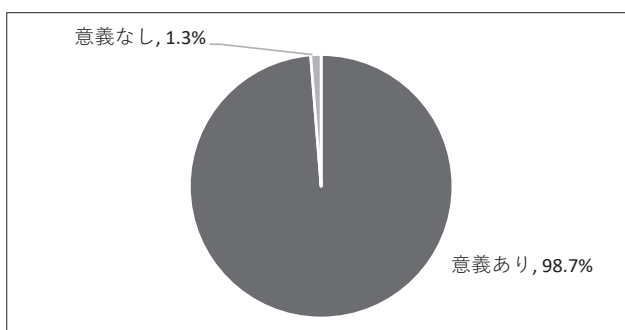


(図1) 実習開始前の期待と不安

実習開始前に、期待と不安のどちらが大きいのかとの質問に対し、図1のように、「期待が大きい」と回答した学生は11.6%にとどまった。実習年度や施設種別による差はみられない。後述する期待と不安の内容を見れば、実習に期待する部分を具体的に挙げてはいるものの、実習そのものを不安と感じる学生が圧倒的に多い。

不安の解消のために、学生が、児童福祉施設の概要や実習内容を、より具体的に想定することができるような科目教授内容や実習指導の工夫が必要である。このことは、第2章で考察する。

### 2 実習の意義の有無 回答者数 2023年：81名、2024年：76名、計：157名



(図2) 実習の意義の有無

実習終了後、実習の意義があったかについての質問に対し、98.7%の学生が、「意義があった」と回答した。実習年度や施設種別による差はみられない。前述のように実習開始前には不安と感じる学生が多かったことに対し、実習終了後には、ほとんどの学生が施設実習を肯定的にとらえていることが分かる。

## 第2章 実習開始前の期待と不安、実習の成果と課題

第2章では、実習を行っている18施設を6つの種別に分類し、実習開始前の「期待と不安」、実習終了後の「成果と課題」の内容について、分類ごとに回答を分析、考察した。

### 1 児童養護施設

児童養護施設は、保護者のない児童、虐待されている児童その他環境上養護を要する児童を入所させて、これを養護し、あわせて退所した者に対する相談その他の自立のための援助を行うことを目的とする施設である。幼児から高校生まで幅広い年齢層が入所している。

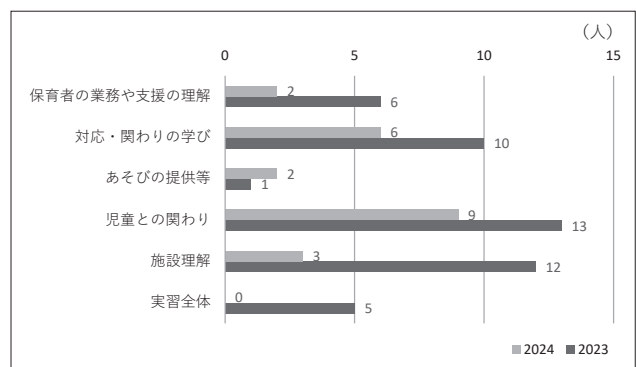
児童の日常的な養育や、被虐待や障害などの様々な事情を踏まえた専門性の高い支援を行っている。

回答者数

2023年 実習開始前：30名、実習終了後：36名

2024年 実習開始前：14名、実習終了後：31名

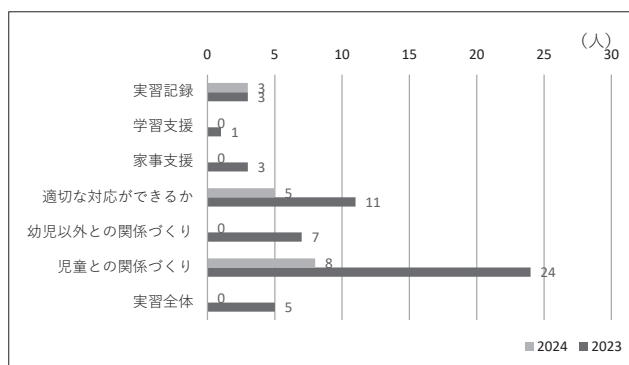
#### 1) 期待と不安について



(図3) 実習開始前の期待（児童養護施設）

実習開始前には、「児童との関わり」や具体的な「対応・関わり」についての期待が高い。全体的には各年度とも同様の傾向であるが、「施設理解」の期待は2023年度が高い一方、2024年度の回答は0である。

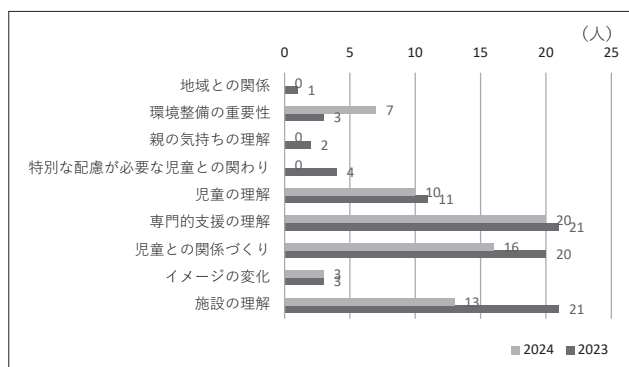
実習開始前の不安については、前述のとおり「児童との関わり」を期待する一方で、実際の「関係づくり」に不安を感じている。また、様々な背景をもった児童に対して「適切な対応ができるか」に不安を感じており、単なる関係づくりではなく、専門的な対応の難しさに対する不安がある



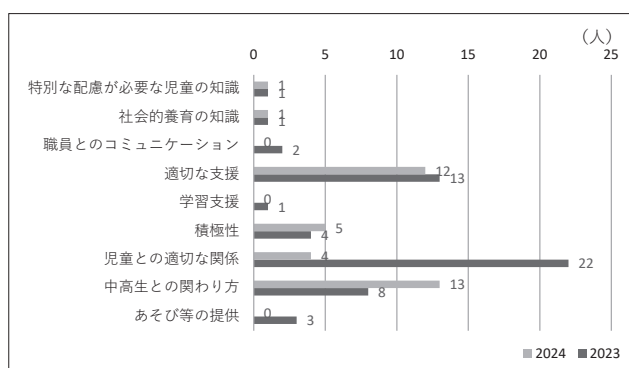
(図4) 実習開始前の不安 (児童養護施設)

と考えられる。「幼児以外の児童との関係づくり」は、主に中高生との関わりに対する不安を示している。回答数の年度内訳は、2023年度の7に対し、2024年度は0である。これは、2024年度の回答数が少ないことが影響していると考えられる。

## 2) 成果と課題について



(図5) 実習の成果 (児童養護施設)



(図6) 実習の課題 (児童養護施設)

実習の成果として、児童の実態や職員の具体的な業務内容などの「施設の理解」が多く、具体的には、児童の生活歴・特性・状況等に応じた関わり方などの「専門的支援の理解」が挙げられている。

課題としては、「児童との適切な関係」「適切な支援」を

挙げていることから、社会的養護について、より専門的な知識と実践力を身につける必要がある。また、「児童の理解」や「児童との関係づくり」が良好であったことがうかがえるが、「中高生との関わり方」を課題とした者も多い。理由として、中高生は施設外や自室で過ごすことが多いため、学生が関わる機会が少ないことと、学生自身が中高生と関わる経験が少ないことによる不安や苦手意識があることが挙げられる。このことは、筆者が、実習期間中の指導訪問の際や実習終了後に直接学生から聴き取った内容である。

## 3) 実習前後の考察

学生は、実習開始前には「児童との関わり」「対応・関わりの学び」に期待したとおり、「児童との関係づくり」「専門的支援の理解」を成果として挙げている。しかし、一方で、実際の「児童との適切な関わり」「適切な支援」を課題として挙げている。基本的な関係構築や理論・方法の理解はできて、年齢・生活歴・特性・被虐待や障害などの様々な個別の事情に応じた、より専門性の高い実践には多くの課題があるということである。

短期間の実習で、この課題を達成するに十分な時間を得て、技術として身につけることは容易なことではないが、関連科目や実習指導において、事例学習や演習を行うなど教育・指導を強化すべき項目である。

## 2 乳児院

乳児院は、乳児を入院させて、これを養育し、あわせて退院した者について相談その他の援助を行うことを目的とする施設である。

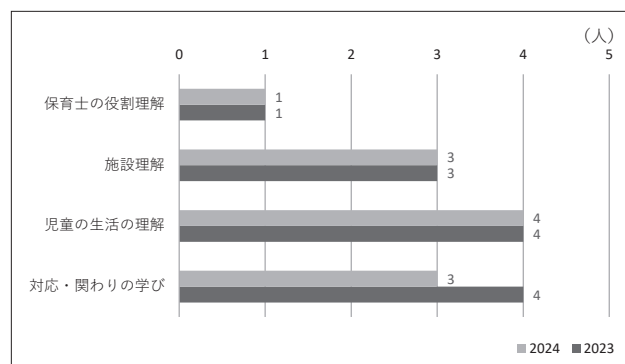
成長・発達に応じた養育を行い、個々の特徴に応じた専門的支援を行っている。

回答者数

2023年 実習開始前：9名、実習終了後：7名

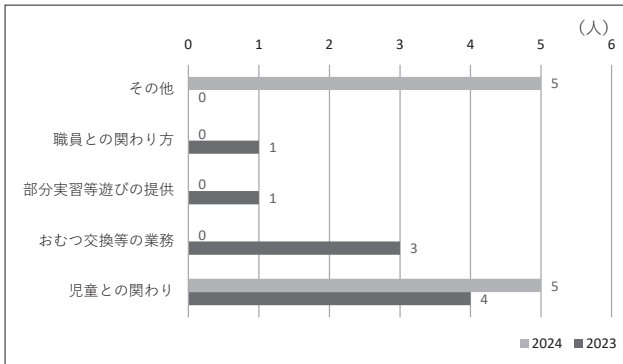
2024年 実習開始前：7名、実習終了後：11名

## 1) 期待と不安について



(図7) 実習開始前の期待 (乳児院)

実習開始前の期待については、2023年度、2024年度と

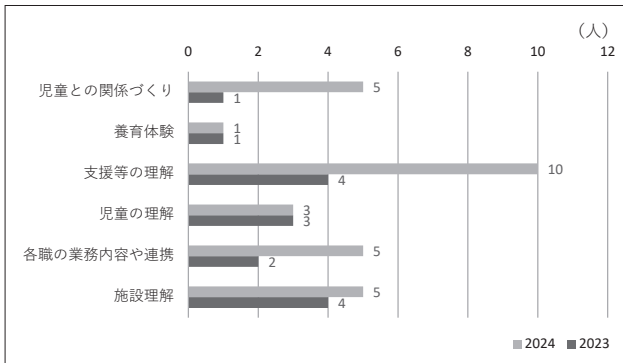


(図8) 実習開始前の不安 (乳児院)

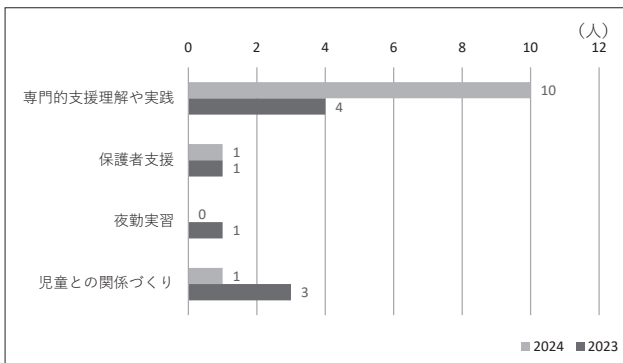
も同様の傾向であり、「児童の生活の理解」「対応・関わり」の学び「施設理解」といった基本的事項が中心である。

実習開始前の不安については、「児童との関わり」が2023年度、2024年度ともに多い。「その他」は、2024年度のみでの回答で、実習記録と責任実習に対する不安である。2024年度は、不安の内容が具体的に回答されていないことから、実習に向けた目標設定や準備が不十分であり、実習中の活動のイメージがわからず、何を記録すべきか不安があるものと考えられる。このことについての実習指導の強化が必要である。

## 2) 成果と課題について



(図9) 実習の成果 (乳児院)



(図10) 実習の課題 (乳児院)

実習の成果として、「施設理解」「支援等の理解」「児童の理解」「各職の業務内容や連携」など基本的事項の理解が挙げられている。

課題としては、個々の発達や特徴を踏まえた「専門的支援の理解や実践」といった、より専門的な取り組みが多く挙げられている。

## 3) 実習前後の考察

学生は、実習開始前に「児童の生活の理解」「対応・関わり」の学びに期待したとおり、「施設理解」「児童との関係づくり」「支援等の理解」を成果として挙げている。しかし、一方で、実際の成長・発達に応じた養育や愛着・信頼関係の構築などの「専門的支援の理解や実践」を課題として挙げている。

このことは、前述した児童養護施設と同様の結果を示している。したがって、指導強化項目も同様である。

## 3 障害児施設

障害児施設の内訳は、障害児入所施設と児童発達支援センターである。

障害児入所施設は、障害児を入所させて、支援を行うことを目的とする施設であり、医療型と福祉型の2分類がある。

児童発達支援センターは、地域の障害児の健全な発達において中核的な役割を担う機関として、障害児を日々保護者の下から通わせて、高度の専門的な知識及び技術を必要とする児童発達支援を提供し、あわせて障害児の家族、指定障害児通所支援事業者その他の関係者に対し、相談、専門的な助言その他の必要な援助を行うことを目的とする施設である。

児童が、障害の種類や程度に応じて、様々な経験をしながら、基本的な生活習慣や社会性を身につけられるようにするための専門的な支援を行っている。

### 回答者数

2023年 実習開始前：22名、実習終了後：13名

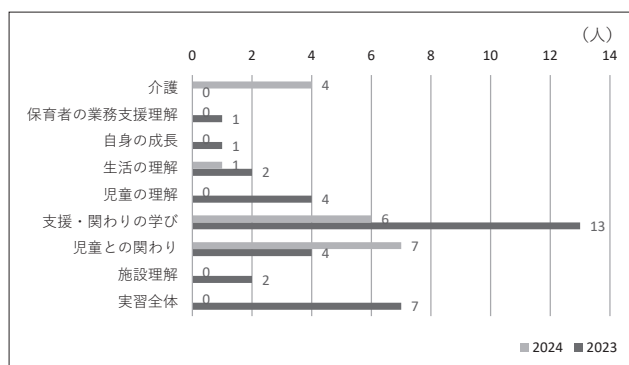
2024年 実習開始前：22名、実習終了後：14名

### 1) 期待と不安について

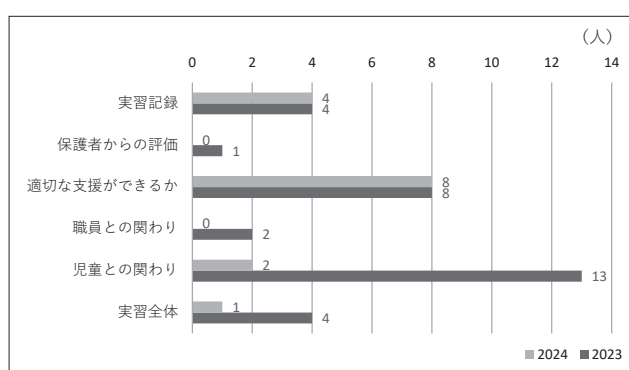
実習開始前の期待については、年度によって異なる傾向を示しているが、合算すると「支援・関わり」の学びが際立って多い。次いで「児童との関わり」が多くなっている。

ところが、この2項目の実践について不安を感じている学生が非常に多い。これは、障害児者と関わる経験が少ないことや、理解することと実践することの難易度の違いが影響しているものと考えられる。

また、期待の「その他」は障害児者の介護に関するもので、2024年度の学生のみ回答している。新たな経験や学びへの意欲と捉えることができる。

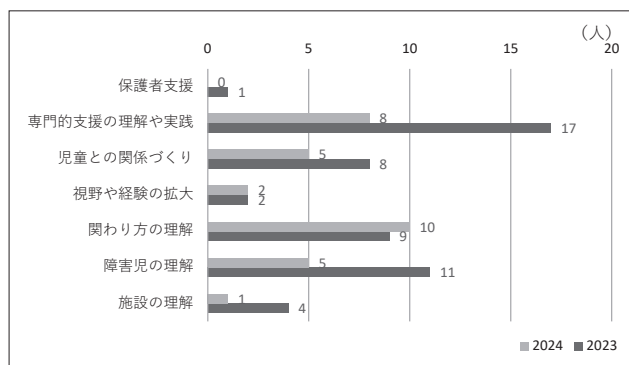


(図 11) 実習開始前の期待 (障害児施設)

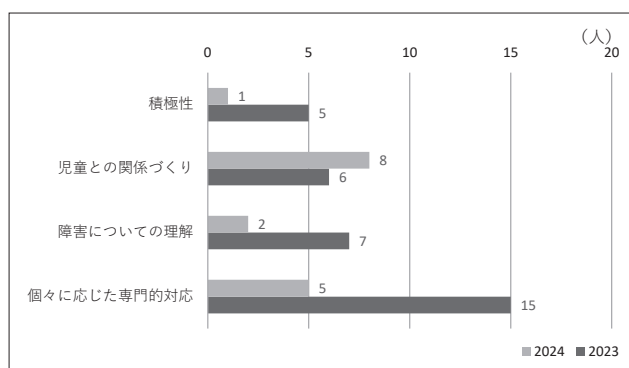


(図 12) 実習開始前の不安 (障害児施設)

## 2) 成果と課題について



(図 13) 実習の成果 (障害児施設)



(図 14) 実習の課題 (障害児施設)

実習の成果として、多くの学生が「専門的支援の理解や実践」「関わり方の理解」を挙げている一方、「個々に応じた専門的対応」「児童との関係づくり」などの実践的取り組みに課題意識が見られる。障害の種類や程度、児童の多様な個性など、障害や個人に対する理解が深まったことにより、個別化の必要性を理解したためであると考えられる。

## 3) 実習前後の考察

学生の多くが、「支援・関わりの学び」に期待し、成果として「専門的支援の理解や実践」「関わり方の理解」を挙げていることから、一定の目標に到達したと自己評価している。

一方で、多くの学生が、「個々に応じた専門的対応」を課題として挙げており、個別対応の課題は残っている。しかし、この点において、経験豊富な職員と学生の間には大きな格差があることから、その必要性を理解したことを一定の成果としてよいのではないかと考える。よって、様々な障害の理解、多様な手段を用いたコミュニケーション方法、基本的な生活習慣や社会性を身につけられるような専門的支援などについて、事前の実習指導で教育するより、実習での経験と学びを基に、より深く検討することに重きを置く事後指導・教育が適切であると考えられる。

## 4 母子生活支援施設

母子生活支援施設は、配偶者のない女子又はこれに準ずる事情にある女子及びその者の監護すべき児童を入所させて、これらの者を保護するとともに、これらの者の自立の促進のためにその生活を支援し、あわせて退所した者について相談その他の援助を行うことを目的とする施設である。

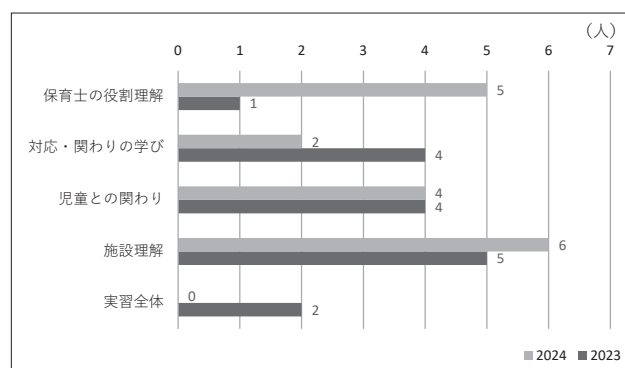
DV被害をはじめ、様々な事情を抱えた母子の保護と自立に向けた専門的支援を行っている。

回答者数

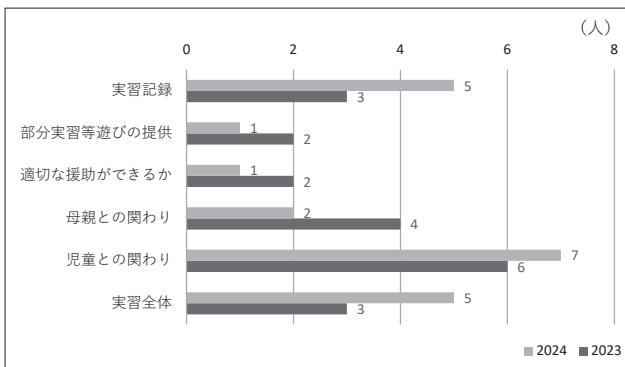
2023年 実習開始前：11名、実習終了後：10名

2024年 実習開始前：9名、実習終了後：12名

## 1) 期待と不安について



(図 15) 実習開始前の期待 (母子生活支援施設)

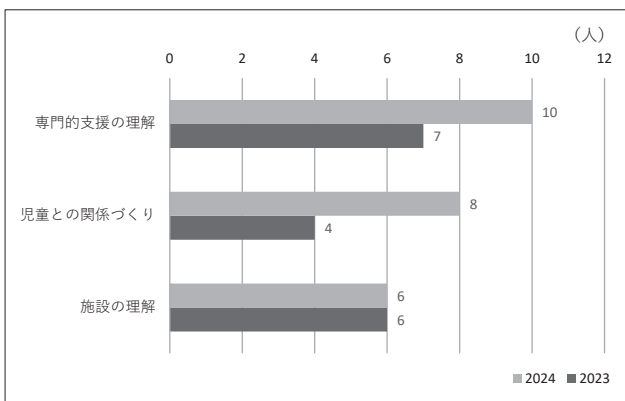


(図 16) 実習開始前の不安 (母子生活支援施設)

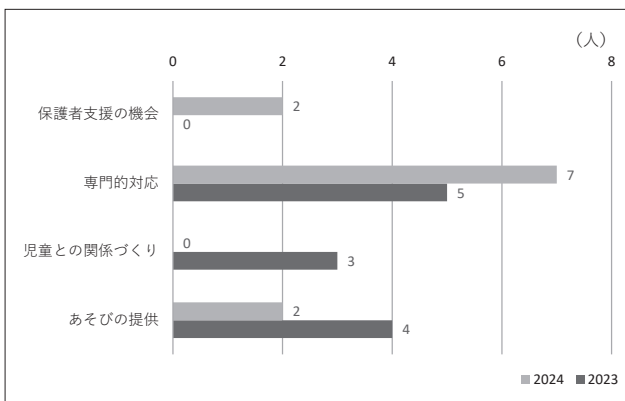
実習開始前には、「施設理解」「保育士の役割理解」などの学びに対する期待が高い。「児童との関わり」については、期待も不安も大きい。

他の実習を含めて「母親との関わり」経験が少ないため、このことに不安を感じている学生が多い。また、「実習記録」に対する不安が大きいのは、施設や支援内容の理解が不足していることから、実習内容と記述すべき内容を具体的に想定できなかったものと考えられる。

## 2) 成果と課題について



(図 17) 実習の成果 (母子生活支援施設)



(図 18) 実習の課題 (母子生活支援施設)

成果としては、「専門的支援の理解」「児童との関係づくり」「施設の理解」に集約されている。「専門的支援の理解」を成果として挙げている一方、「専門的対応」という実践面を課題とした学生が多い。これは、基本的事項の理解や経験は得られたものの、より高い専門性を身につける必要があると感じているものと推察する。

また、「保護者支援の機会」がなかった(ほしかった)という回答は、2024年度のみであり、意識の高さがうかがえる。

## 3) 実習前後の考察

「施設理解」に対する期待が大きかったとおり、「専門的支援の理解」を含めて多くの学生が成果として挙げている。一方で、当該施設特有の「専門的対応」を課題として挙げている。児童に対する専門的支援に加えて、保護者と関わる機会が少なかったことによる経験や理解不足が原因として考えられる。特にプライバシーに配慮した施設の特性上、実習中に保護者支援を行うことは困難なものであるため、事例学習などを通して支援のあり方を学ぶことが有効であると考えられる。

## 5 児童相談所 (一時保護施設)

児童相談所の一時保護施設は、児童虐待のおそれがあるときなど、児童の安全を迅速に確保し適切な保護を図るため、又は児童の心身の状況、その置かれている環境その他の状況を把握するため、児童の一時保護を行う施設である。

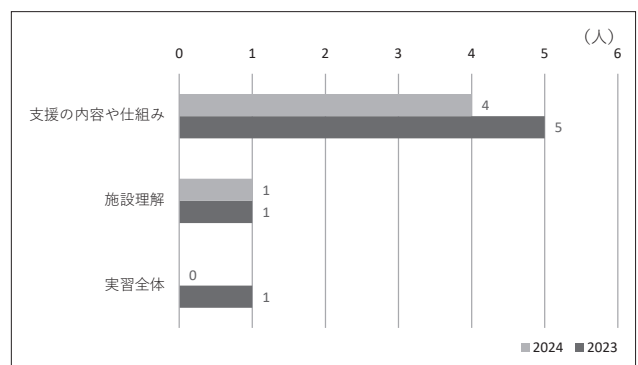
児童の精神状態を十分に把握し、児童の心身の安定化を図り、安心感をもって生活できるよう支援する。

回答者数

2023年 実習開始前：5名、実習終了後：4名

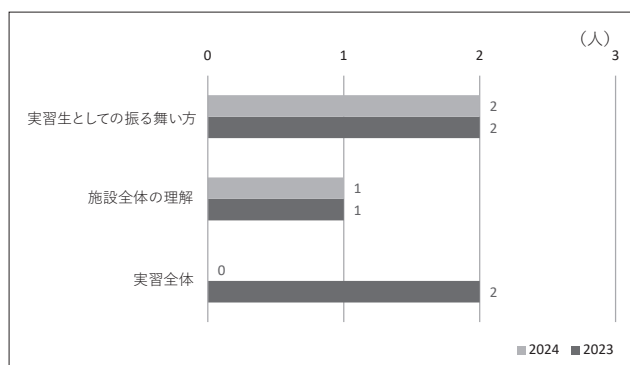
2024年 実習開始前：5名、実習終了後：5名

### 1) 期待と不安について



(図 19) 実習開始前の期待 (児童相談所)

実習開始前には、「支援の内容や仕組み」を学ぶことについての期待が非常に高い。学生は、児童虐待や社会的養護等において、児童相談所が果たす役割の大きさを十分に

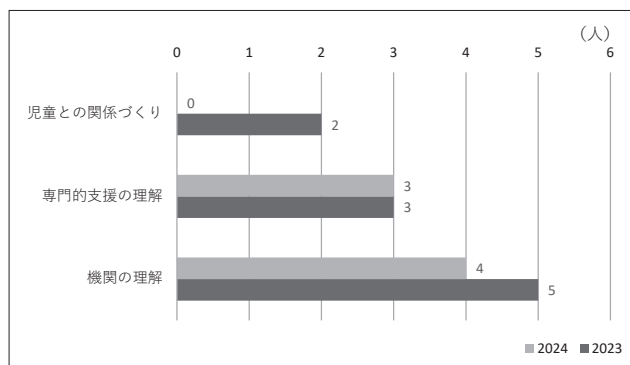


(図 20) 実習開始前の不安 (児童相談所)

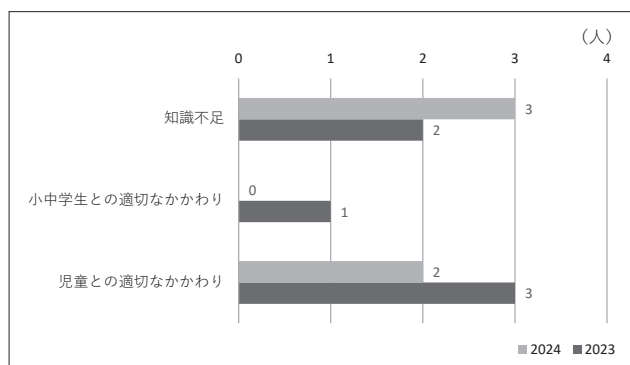
理解している。しかし、その具体的な内容の理解には至っていないため、このことに期待する向きが多かったとみている。

不安については、「実習生としての振る舞い方」が挙げられており、専門行政機関、一時保護施設についての理解が不足していることや、一時保護されている児童との関わり方に難しさを感じていることが理由として考えられる。

## 2) 成果と課題について



(図 21) 実習の成果 (児童相談所)



(図 22) 実習の課題 (児童相談所)

「機関の理解」「専門的支援の理解」が成果として挙げられている一方、課題として「知識不足」を挙げた学生もいる。これは、児童相談所の機能が多岐にわたるほか、当該

機関は多機能化しており、子ども家庭福祉以外の領域に関する知識が求められたことが理由として考えられる。

また、一時保護施設の「児童との適切ななかかわり」の課題も挙げられている。児童が一時保護されるに至った背景を踏まえ、今後措置が決まっていく児童との関わりは、十分な配慮を要するためであると考えられる。

## 3) 実習前後の考察

実習開始前には、「支援の内容や仕組み」に対する関心が高く、成果としても「専門的支援の理解」を含む「機関の理解」が挙げられている。

また、「実習生としての振る舞い方」を不安として挙げているとおり、実際に「児童との適切な関わり」を課題として挙げている。前述したように、一時保護児童との関わりには、不安を抱える児童の気持ちを受け止めるなどの十分な配慮が必要とされるため、実習指導を充実させるとともに、オリエンテーション時に実習機関の指導担当者に指導・教育を要請するなどの連携強化を図ることも必要である。

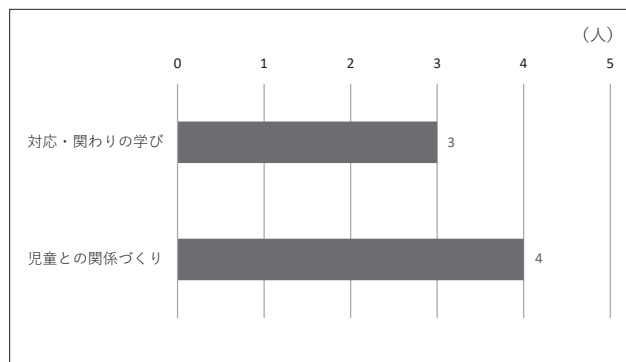
## 6 児童自立支援施設

児童自立支援施設とは、不良行為をなし、又はなすおそれのある児童及び家庭環境その他の環境上の理由により生活指導等を要する児童を入所させ、又は保護者の下から通わせて、個々の児童の状況に応じて必要な指導を行い、その自立を支援し、あわせて退所した者について相談その他の援助を行うことを目的とする施設である。

不適切な家庭環境によって、基本的な生活習慣が身につけていない児童や、発達障害を持つ児童なども入所している。回答者数

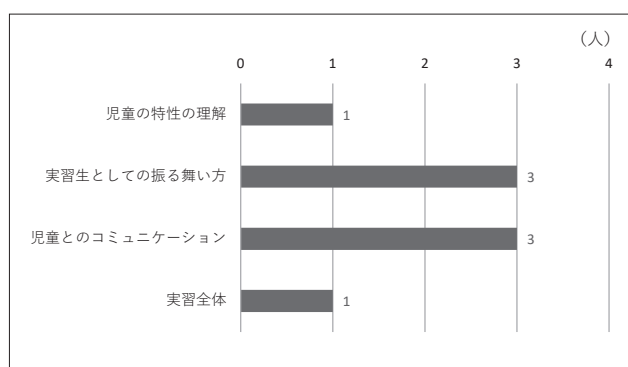
実習開始前：4名、実習終了後：5名 (2023年、2024年計)  
※実習した学生数が少なく、個人の特典等を避けるため2年分合算した。

## 1) 期待と不安について



(図 23) 実習開始前の期待 (児童自立支援施設)

実習開始前には、「児童との関係づくり」に対する期待

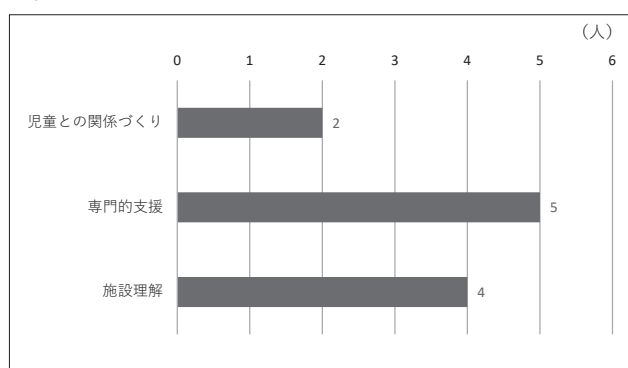


(図 24) 実習開始前の不安 (児童養護施設)

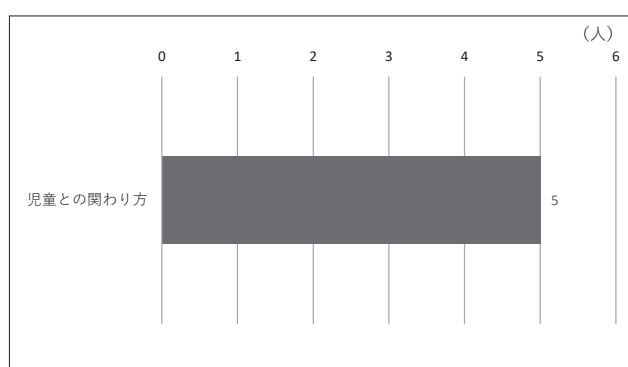
が大きい一方、実際の「児童とのコミュニケーション」に対する不安を感じている。

また、「実習生としての振る舞い方」に対する不安がある一方、そのことの学びとなる「対応・関わりの学び」に対する期待が見られる。

## 2) 成果と課題について



(図 25) 実習の成果 (児童自立支援施設)



(図 26) 実習の課題 (児童自立支援施設)

実習の成果として、「施設理解」「専門的支援」の理解が進んだことが分かる。

課題としては、回答したすべての学生が「児童との関わり方」を挙げており、施設の目的や特徴を踏まえた対応の難しさを実感したのと考えられる。

## 3) 実習前後の考察

ほとんどの学生が「対応・関わりの学び」に期待し、「専門的支援」を含む「施設理解」を成果として挙げている。

また、「児童とのコミュニケーション」「実習生としての振る舞い方」に不安を感じていたとおり、全ての学生が、「児童との関わり方」を課題として挙げている。当該施設の特徴を踏まえ、児童の行動の背景にある生活歴を踏まえた関わりなどについて、他の施設と同様に実践面の弱さを指摘することができる。したがって、事例学習や演習などの指導・教育が必要である。

### おわりに

施設実習に対する学生の意識には、実習開始前の不安な状態と実習終了後の肯定感という大きな変化がある。適切な教育・実習指導により、実習開始前の不安を軽減することができれば、施設実習の成果と意義がより高まるものと考えられる。

また、より詳細な調査分析では、施設種別ごとの期待、不安、成果、課題の内容が明らかになった。児童との直接的な関わりについては、学生によって評価が分かれている。また、施設の機能・特性や専門的支援の内容についての理解を成果として挙げた学生が多い。一方で、それを踏まえた専門的実践を課題として挙げた学生が多い。

この結果を踏まえて、学内における授業と実習指導で教授・指導すべき事項が見えてきた。全体的に、学生が専門的支援の内容などを理解する力と、施設の特性や児童の個性、背景などに応じた実践をする力の間には大きな乖離があるため、後者に対して、事例学習や演習を行うなどの指導強化が必要である。

児童福祉施設における施設実習は、保育士の専門性に必要な要素を体験的に学び、身につけるものであり、保育士になろうとするものにとって意義ある実習であることは疑いようもない。その実習に対して不安要素が大きいということが、学生の実習開始前・実習中の取り組みや成果に具体的にどのように影響するのだろうか。

今後は、学生の実習開始前の不安要素解消に向けた教育・指導についてより深く研究したい。また、実際に使用している評価票を活用し、学生の自己評価と指導者による評価を比較し、本学学生の強みと弱みを明らかにしたい。さらに、その結果をもとに、科目における教授内容や実習指導のあり方や、実習を行う学生に対する支援方法について検討したい。

### 参考文献

- (1) 小野澤昇、田中利則、大塚良一 (2014) 「保育の基礎を学ぶ 福祉施設実習」 ミネルヴァ書房
- (2) 加藤洋子、一瀬早百合、飯塚美穂子 (2018) 「事例を通して 学びを深める 施設実習ガイド」 ミネルヴァ書房

- (3) 田中卓也、松村齋、小島千恵子、岡野聡子、中澤幸子（2020）  
「保育者になる人のための実習ガイドブック」萌文書林
- (4) 駒井美智子（2018）「施設実習ガイド」萌文書林
- (5) 小原敏郎、直島正樹、橋本好市、三浦主博（2016）「本当に  
知りたいことがわかる！ 保育所・施設実習ハンドブック」  
ミネルヴァ書房